

十二 若山牧水

幾山河越えさりゆかば寂しさのはてなむ国ぞけふも旅ゆく
白鳥はかなしからずや空の青海のあをにも染まずただよふ

郷土の歌人、若山牧水のよく知られた歌です。

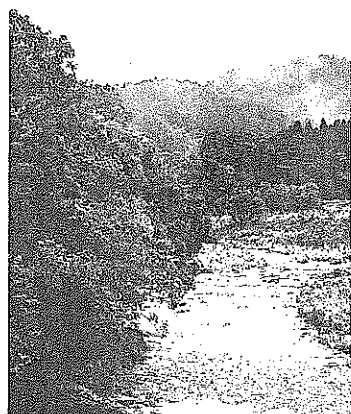
牧水(本名 繁)は明治十八年、東白杵郡東郷村坪谷(今の東郷町坪谷)に医者いしやくの長男として生まれました。幼い頃から読書や作文が好きで、県立延岡中学校(今の延岡高等学校)に入学した頃から文学に親しみ、ますます文才を發揮して短歌の研究会の中心となつて活躍しました。中学最後の年に号(ペンネーム)を「牧水」と改めています。「牧」は母の名である「マキ」、「水」は故郷の家の下を流れる坪谷川の水にちなんでいます。

父母について牧水は「父の愛は黒き幕の如く、母の愛は釘のごとし」と語っていますが、父立蔵は「幕」のように牧水をつつみ、護つてくれる人だったそうです。それに対して、母マキは牧水を一人前に育てたいと、釘を打つように厳しく接したということです。

そんな厳しい母でしたが、牧水にとって忘れられない思い出がありました。

「おかあちゃん、歯がいたいよう!」

牧水は五歳ぐらいから歯が痛むことがよくありました。右も左も虫歯だらけて痛み始めると、どの歯が痛むのかわ



尾鈴連峰と坪谷川

からなくなり、まるで顔から頭全体が痛むかのようになつてきて、おいおい泣きわめいていると、

「かわいそうに……かわいそうに……」と母は牧水をひぎに抱き上げていっしょに涙を流すのです。母の涙を見ると牧水はいっそう悲しくなり、なお泣き続けましたが、いつのまにかそれで痛みを忘れて、泣き疲れながら眠ってしまふことがよくありました。

またある時は、泣く牧水を背負つて下の坪谷川に魚釣りに行き、「ほら、たくさん釣れるよ。」

背中の牧水に話しかけて痛みをやわらげようともしました。

歯を痛み泣けば背負ひてわが母は峽の小川に魚を釣りにき

と、当時の思い出を歌っています。

牧水の歯が痛まぬよう、家から十町(約一キロメートル)も川上にまつつてある水神様に真夜中の十二時に牧水を背負つてお参りして、祈願することたびたびありました。

母は山に入つてわらびを摘んだり、竹の子をもらいだり、栗を拾つたりすることがたいへん好きで、よく牧水を山へ



連れて行ってくれました。昼になると景色のよい小高い丘や谷川のほとりて弁当を食べたりすることもありました。この、母とともに野山を歩きまわった思い出は、牧水にとって生涯、忘れることのできないものとなりました。

釣り暮し帰れば母に叱られき叱れる母に渡しき鮎あゆを

これは「釣りに夢中になり今日も日が暮れてしまった。母にしかられながらも鮎を母に渡している」という歌ですが、幼いころのこうした生活が牧水の自然を愛する心を育てたとも言えます。

牧水の自然への思いがあふれた出来事が起こりました。

大正十五年、静岡県に住んでいた牧水は、いつも散歩している「千本松原」の松が伐採ばっさいされようとしているのを知ったのです。そこで牧水は、千本松原の保存大会を開催するなどして、その保存を訴え続けました。賛同する人が多く、千本松原は保存されることになり、現在に至っています。自然は牧水にとって母との思い出そのものであり、千本松原の自然がなくなっていくことは耐えられないことだったのでしょう。母と野山を歩きまわった日々、そんな思い出を歌ったのが次の歌です。

母恋しかかる夕べのふるさとの桜さくらむ山やまの姿よ

母ひとり拾ひろふともなく栗くりひろふかの裏山うらやまの秋あきふかみけむ

後に、日本を代表する歌人となった牧水が故郷に帰省したとき、村では大歓迎会が開かれ、母とともに招かれました。あいさつの中で久しぶりに故郷へ帰った喜びを語っていた牧水でしたが、話が母のことにおよぶと、

「自分の今日あるのは母のおかげです……。」

と母への感謝の言葉を涙ながらに述べました。牧水の突然の涙に村人たちは驚きましたが、もらい泣きをする人もいました。

昭和三年九月十七日、牧水は静岡県沼津市で四十三歳の生涯を閉じました。死の直前、牧水は息子の旅人^{たびと}を枕もとに呼び、

「坪谷のマキばあちゃんを迎えに行つてこい。」

と言つたそうです。静岡と宮崎、その距離を考えてもかなうはずのない母との再会に、どんな思いを寄せたのでしょうか。遺体はだびに付し、分骨して坪谷に帰りました。牧水が亡くなった次の年、母マキは牧水のあとを追うように亡くなりました。

「自分が死んだら、繁の分骨を私の胸に抱かせて埋めてほしい。」という言葉を残して。

・だびに付す……火葬にする。

・分骨する……亡くなった人の骨を二か所以上に分けて葬ること。